様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2022
課題番号：１５Ｋ０２１０７

研究課題名（和文）近代的演奏会の成立と変遷からみる音楽文化のグローバル化：欧州諸都市の比較研究

研究課題名（英文）The globalisation of musical culture: a comparative study of European cities to examine the formation and evolution of the modern orchestral concert

研究代表者
小石　かつら（Koishi, Katsura）

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：００６３６７８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「演奏会」に注目して音楽の上演実態を明らかにし、その結果を欧州諸都市間で比較することにより、音楽文化のグローバル化の実態を解明することである。具体的には、欧州最古の民間オーケストラであるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の創立以来のプログラムの変遷から研究を進めた。まずは、当団体で実施された1781年から1847年のプログラムをデータ化した。
この上演データを用いた研究成果としては、プログラム構成の固定化の実態、演奏曲目の固定化の実態、プログラム記載内容の実態、近隣劇場（ドレスデン、ベルリン、ロンドン）との人的移動の実態、上演内容の比較、見本市との関連が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
一連の研究の結果、（ライプツィヒの）オーケストラ演奏会は、18世紀末からはオペラからの抜粋作品主体であったが、19世紀前半をかけて、徐々に交響曲を主役に据える在り方へと変遷したことが明らかとなった。また見本市の開催と演奏会の上演曲目には大きな関連があり、例えば新年の見本市に合わせた演奏会では特定の交響曲がメインに据えられ、この兆候は政治的な式典の際の演奏曲目とも関連があることが明らかになった。これとは別に、プログラムの記載内容の変遷から、音楽がジャンルごとに明確に区別されていたことが明らかとなり、音楽史記述における新しい方向性を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the actual state of music performance, focusing on 'concerts', and compared the results between European cities to elucidate the actual state of the globalisation of music culture. Specifically, the research started with the changes in the programme of the Leipzig Gewandhaus Orchestra, the oldest private orchestra in Europe, since its foundation. I compiled data on the programmes conducted by the organisation from 1781 to 1847.
The results of the research using this performance data revealed the actual situation of fixed programme structure, the actual situation of fixed performance items, the actual situation of programme descriptions, the actual situation of personnel movement between neighbouring theatres (Dresden, Berlin, London), comparison of performance contents, and the relationship with trade fairs.

研究分野：芸術学、音楽学

キーワード：演奏会　オーケストラ　ライプツィヒ　メンデルスゾーン　ベートーヴェン　プログラム　ゲヴァントハウス　交響曲

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

西洋音楽史の分野では、オペラとオーケストラ等器楽音楽の歴史は、これまで個別に扱われてきた。しかし音楽を享受する側に立てば、これらは同時に存在し、相互に連関している。申請者は現在まで一貫して「演奏会」に焦点をあてた研究に取り組んできたが、本研究課題ではオーケストラ演奏会という個別の事例に加えて、同地域同時期のオペラ公演の詳細との相互連関を精査することで、市民の音楽享受の実態を解明することとした。また、音楽が演奏される場が教会や宮廷といった限定された場から、公の「演奏会」へと移行したのはフランス革命を経て市民が台頭した 19 世紀初頭である。ここから現在に通じる「演奏会」が成立し、受け手である市民の趣向に合わせて、演奏会のシステム化およびプログラムに組まれる楽曲の固定化が進んだ。本研究課題では、この音楽文化の公共化の黎明期に時期的な中心軸を据え、地域的な中心は、世界最古の民間オーケストラを有するドイツ・ライプツィヒに据えて、その実態を精査した上で、ヨーロッパ諸都市における様相と比較し、広域での伝播、変遷、相互連関をたどることによって音楽文化のグローバル化の実態を解明することとした。このような調査は、劇場の学芸員が携わることはあっても、研究対象として取り組まれることは少なかった。なにより「演奏会」という場に着目して研究を展開する点が、作曲家・作品研究中心であった音楽学研究において画期的であり独創的である。またオペラと演奏会という従来個別に考えられてきた分野を、演奏という側面から相互に連関させる視点は初めてのものである。当時は各都市によって演奏形態に隔たりがあったが、19 世紀ライプツィヒを軸にし、立脚点を明確にして欧州諸都市の演奏会の変遷を比較する研究は類をみない。そしてプログラム実物や新聞、雑誌、手紙、自筆譜等の一次資料を用いる本研究は、音楽学研究に軸足を置きつつ社会学や歴史学の手法を組み合わせるもので、文化・歴史を相対的に捉えることが可能となり、これまでの歴史記述を一新しようとするものであった。また、このオーケストラを有するドイツの都市ライプツィヒについて、とりわけ見本市の開催状況について、その実態と影響等を精査し、それらの成果と演奏会の状況の連関を詳らかにすることも、これまで行われてきていない研究であった。

２．研究の目的

本研究は、音楽が鳴り響く「場」としての「演奏会」に注目することで、多面的な音楽ジャンルの相互連関を明らかにすることを目的とする。さらにその結果をヨーロッパ諸都市における状況と比較調査することにより、音楽文化のグローバル化の実態を解明する。

３．研究の方法

ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の創立（1781 年）以来のプログラムを全て入手し、その内容を作曲者、ジャンル名、作品名等、演奏者、演奏順等に整理した上でエクセルに入力し、データ化する。ライプツィヒ市歴史博物館に所蔵されている 15000 件を超えるプログラム実物を利用するにあたっては、学芸員の Kerstin Sieblist 氏の協力のもと、研究開始時点でおよそ 1860 年までの閲覧・複製撮影を済ませていた。これらは未整理で段ボール箱に保管されていたため、年代順に再整理する必要があり、本研究期間では、この整理作業を行った。それは、膨大なデータをコンピューター入力（エクセルを使用）の上情報を管理し、内容を精査するものであった。同様に、ロンドン・フィルハーモニー協会のプログラムについてもエクセルデータ化した。作成したデータを用いて、演奏順序のスタイルを抽出する、特定の日の演奏内容を精査する、というような研究を進める。

４．研究成果

（1）前提としてのデータ作成

プログラム内容のエクセル入力に関しては、研究開始時点ではゲヴァントハウス管弦楽団の分の 1842 年までしか入力出来ていなかったが、ゲヴァントハウス管弦楽団については 1781 年から 1880 年までを入力ミスの再確認まで含めて完全に終了、プログラム現物についても 1880 年の分まで、ライプツィヒ市史料館に保管されている全数の閲覧および複写を終了し、整理を終えた。また、ロンドン・フィルハーモニー協会の 1813 年の創立より 100 年分のプログラムについては、データ入力を終了した。

（2）演目構成

演奏会の曲目構成に注目し、とりわけ演奏会後半が交響曲一曲のみになる事例に注目して、その変遷や内訳について調査をすすめた。その成果の一部に関して、日本音楽学会全国大会にて「転換点としての《エロイカ》：演奏会史からみたその意義について」と題する口頭発表をおこなった。また 1847 年までのプログラム変遷の特徴をまとめ、「オーケストラ演奏会のプログラム構成における『二つのモデル』への集約過程：ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会記録（1781-1847）を検証する」と題する論文を『阪大音楽学報』に投稿した。
また、オンラインセミナーや市民講座にて、研究成果を発表した。さらに、日本の劇場が発行す

る雑誌において、「ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団におけるシューベルトの交響曲《ザ・グレイト》」と題した論文を発表した。

（3）家庭音楽
演奏会の背後には、演奏会で聴いた作品を再現して楽しむ文化がある。この実態にせまることを目的として、家庭音楽の中からメンデルスゾーンの初期（未出版）ピアノ作品の楽曲構成に注目して研究をすすめた。これについて、アイルランド・メイヌース大学での国際19世紀ヨーロッパサロン音楽学会にて"The desire for a new style of Salonmusik: From F. Mendelssohn to F. Liszt"と題する口頭発表を行った。この口頭発表での内容をさらに追求し、「F・メンデルスゾーンの形式感に関する一考察:ピアノ作品習作期にみられる『緩急二部分構造によるスタイル』完成への過程」と題する論文を関西学院大学美学研究室発行の『美学論究』に投稿した。
また、本研究のメインテーマの背景である「オーケストラの演奏会でオペラからの抜粋上演が大人気だった」ということの実態を具体的に明らかにするため、演奏会用序曲《美しきメルジーネの物語》を例に、作品内容について精査した。オペラからの抜粋で最も好まれたのは「序曲」だが、これには印刷楽譜の大量出版と楽器の普及が関連する。家庭でたのしむ音楽として「再利用」されるオペラ作品において重要なのは「物語性」ではないかと考え、2019年7月に国際美学会でFrom Public Concert to Home Music: Felix Mendelssohn's Concert-Overtures and their "Stories"と題する発表をおこなった。

（4）人的移動と宗教作品
ゲヴァントハウス管弦楽団のプログラムデータを用いて、近隣劇場（主にドレスデン歌劇場）との人的移動について、双方のデータ照合の上、考察をおこなった。その結果、これまでの音楽史で言われてきた「存命でない作曲家の作品が演奏されることは少ない（もしくは滅多に無い）」ということと、まったく異なる結果が見られた。とくに宗教作品に限定して注目した上での成果を早稲田大学オペラ・音楽劇研究所にて「ライプツィヒにおける「コンセール・スピリチュエル」の公演内容と変遷：宗教作品とオペラと交響曲」と題した口頭発表をおこなった。
これに派生する形で、同じ研究手法を用いて、演奏会やオペラが、どのようにグローバル化していくのかに関して、プッチーニのオペラを例にとり、「《蝶々夫人》とわたしたち：すれ違う自己投影イメージ」『他者との邂逅は何をもたらすのか：異文化理解再考』（昭和堂）として発表した。

（5）創作される理想主義
特定の日程（例えば新年）に注目し、特別な演奏会における演目内容の特殊性を明らかにした。祝祭的、政治的な影響が、作品内容に端的に見受けられ、また、宗教的作品と交響曲に互換性があることがわかった。
また、ここでの演奏曲目はほぼ固定されており、演奏会で取り上げられる作曲家には大きな片寄りがあることもわかった。これについて"Creating “characteristics of Germany” in Felix Mendelssohn’s compositions"と題してオランダでの国際学会で口頭発表した。式典に際して作曲された交響曲《賛歌》に着目して「グーテンベルク記念400年祭においてメンデルスゾーンが果たした役割:コラールの引用による「ドイツらしさ」の創出」と題した口頭発表を早稲田大学オペラ・音楽劇研究所にておこなった。
その他、プログラムに記載された事柄と記載されなかった事柄の変遷について調査した。その結果、現代とは異なる演奏会の聴き方の実態が明らかとなった。つ
まり、記載事項により、聴者にとって重要な事柄（関心のある事柄）と重要でない事柄の差異がわかるのだが、現在のように作曲者に注目することがなかった時代において、聴者が注目していたのが、演奏者なのか作品なのかについて、解明することができた。

（6）音楽のジャンル別の聴き方
プログラムに「記載されていた事項、記載されていない事項」に注目し研究を進めることで、聴衆の音楽の聴き方（音楽に対する姿勢）について考察した。これまでの研究では19世記初頭の演奏会は「雑多な内容の組み合わせ」であるとされてきたが、その原因の一つに、プログラムに記載された情報量が少ないことがある。つまり「交響曲」といっても「誰」が作曲した「どの」交響曲か等が記載されていないことが多いのである。そこで、ゲヴァントハウス管弦楽団のプログラムを、1781年から1804年まで、約20年間について調査し、その記載事項が、音楽のジャンルごとによって明確に区別されていたことを解明した。例えば声楽作品は、作曲者名、タイトルやオペラ名などの作品名、歌手名、歌詞の全文が記載されていたが、協奏曲は、独奏楽器奏者の名前と楽器名が記されていた一方で、作曲者名も作品名（番号や調性等）も記されなかった。しかもこれらの記載内容は、慣習的に、極めて例外の少ない状態で常に守られていたのである。以上より、19 世紀初頭は音楽文化の生成期で無秩序であったのではなく、別の価値観で受容されていたと捉えらのではないかと考えた。この成果は、「「書かれていないこと」は何を意味する

のか：ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のプログラムをさぐる」と題して『美学論究』に論文を発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小石かつら	４．巻 36
２．論文標題 「書かれていないこと」は何を意味するのか：ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のプログラムをさぐる	５．発行年 2020年
３．雑誌名 美学論究	６．最初と最後の頁 67-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小石かつら	４．巻 35
２．論文標題 メンデルスゾーンのピアノ作品における『緩急2部分構造スタイル』完成への過程－習作群および《ロンド・カプリッチオーソ》MWV U67に見る対照と連続	５．発行年 2020年
３．雑誌名 美学論究	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小石かつら	４．巻 14
２．論文標題 オーケストラ演奏会のプログラム構成における「二つのモデル」への集約過程：ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会記録（1781-1847）を検証する	５．発行年 2016年
３．雑誌名 阪大音楽学報	６．最初と最後の頁 34-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　2件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 小石かつら
２．発表標題 オーケストラの演奏会はどのように形作られたのか －作品・順序・演奏者－
３．学会等名 庭園想楽（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小石かつら、井上登喜子
２．発表標題 オーケストラ公演のレパートリー、過去・現在・未来ー受け継がれてきたもの、変化していくもの
３．学会等名 庭園想楽（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小石かつら
２．発表標題 演奏会用序曲と「物語」― F．メンデルスゾーンの演奏会用序曲《美しきメルジーネの物語》を例に
３．学会等名 美学会西部会第324回研究発表会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Katsura KOISHI
２．発表標題 From Public Concert to Home Music: Felix Mendelssohn's Concert-Overtures and their "Stories"
３．学会等名 21st International Congress of Aesthetics（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小石かつら
２．発表標題 グーテンベルク記念400年祭においてメンデルスゾーンが果たした役割:コラールの引用による「ドイツらしさ」の創出
３．学会等名 早稲田大学オペラ／音楽劇研究所
４．発表年 2018年

１．発表者名 Katsura Koishi
２．発表標題 Creating “characteristics of Germany” in Felix Mendelssohn’s compositions
３．学会等名 Study Platform on Interlocking Nationalism Cultural Mobilization（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小石かつら
２．発表標題 ライプツィヒにおける「コンセール・スピリチュエル」の公演内容と変遷：宗教作品とオペラと交響曲
３．学会等名 オペラ／音楽劇研究所2016年度6月研究例会
４．発表年 2016年

１．発表者名 小石かつら
２．発表標題 Considering Japan’s Hopeful Attitudes to International Encounter
３．学会等名 THE SECOND EAJS JAPAN CONFERENCE（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 小石かつら
２．発表標題 オーケストラ演奏会の実態調査とその活用の試み：19世紀前半のライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団を例に
３．学会等名 地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ
４．発表年 2016年

１．発表者名 Katsura KOISHI
２．発表標題 Wagner an japanischen Universitaeten: Die Verbindung zwischen der europaeischen klassischen Musik und der akademischen Autoritaet in Japan
３．学会等名 Jahrestagung der Gesellschaft fuer Musikforschung 2015（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 Katsura KOISHI
２．発表標題 The desire for a new style of Salonmusik: From F. Mendelssohn to F. Liszt
３．学会等名 International Bilingual Conference, The Europian Salon: Nineteenth-century Salonmusik（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 小石かつら
２．発表標題 転換点としての《エロイカ》：演奏会史からみたその意義について
３．学会等名 日本音楽学会第66回全国大会
４．発表年 2015年

〔図書〕　計2件

１．著者名 小石かつら（翻訳）	４．発行年 2022年
２．出版社 音楽之友社	５．総ページ数 500
３．書名 ウィーン原典版75　メンデルスゾーン　無言歌集	

１．著者名 和田郁子、小石かつら	４．発行年 2017年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 205
３．書名 他者との邂逅は何をもたらすのか：異文化理解再考	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関